

令和3年度 青少年教育施設を活用した不登校対策事業
第2回 ふれあいキャンプ 事業報告書

担当：沼野

1 事業概要

- (1) 趣 旨 青少年教育施設において、学校生活に悩みをもつ児童生徒を対象に、学習活動、自然体験活動、集団活動、仲間との交流を図ることで新たな自分に気づき、周囲との関係について学び、自分を見つめ直そうとする機会の提供に資するもの。
- (2) 対 象 不登校の小中高生で、本人の参加意志のある者20名程度
- (3) 実施期日 令和3年9月11日(土)～12日(日)
- (4) 実施場所 香々地の青少年の家
- (5) 参加者数 13名(児童生徒 3名、保護者・スタッフ等10名)
- (6) スーパーバイザー 大分大学教授 渡辺 亘 氏
- (7) 支援者 大分大学学生12名
- (8) プログラム

9月11日(土)		9月12日(日)	
時刻	活 動 内 容	時刻	活 動 内 容
12:00	受 付	7:00	起床、洗面
13:00	出合いのつどい	8:00	朝 食
13:30	活動1「自分だけの万華鏡をつくろ	9:00	部屋点検
15:30	う」	9:30	活動2 「海遊び」
17:00	わくわくタイム(自然探索アスレチ		※ボート 浮島 自由遊び
19:30	ック)	11:00	わくわくタイム(選択活動)
21:00	夕食	12:00	昼食
21:30	【保護者懇談会 ～20:30】	12:40	別れのつどい
22:00	入 浴	13:00	解散
	就寝準備		
	就 寝		

①出合いのつどい「アイスブレイキング」(視聴覚室)

MFは会議で、参加者との接し方、特性、担当者の分担について話し合い、出合いの集いに臨んだ。アイスブレイキングでは「自分を動物に例えると」を題材に自己紹介を行い。笑いを含めながら参加者との距離を縮めることができた。

(写真1) MF自己紹介の様子



②「わくわくタイム」(レクリエーション室・創作室・談話室)

参加者の入所が2時間遅れたため出合いの集い後、食事までの時間を「わくわくタイム」変更した。参加者の3人は体を動かすのが好きで、MFと一緒にそれぞれがバスケット、輪投げ、卓球など自分で選択し楽しむことができた。MFは参加者と共に行動し、会話を楽しみながら参加者の願いを聞き入れていた。事前の話では、人見知りや消極的であると聞いていたが、「わくわくタイム」の時間を通じて会話も広がっていった。

(写真2) MFとフラフープを楽しむ



③「自分だけの万華鏡をつくろう」

MF、参加者それぞれが万華鏡づくり挑戦した。万華鏡のまわりの模様や中に入れる草花など工夫を凝らした万華鏡ができた。作成では、参加者が自分の力で実施できるように、MFも参加者と同じく万華鏡作成し、主にサポートにまわってもらった。

創作後は、自分のつくった万華鏡をみんなに紹介したり、他の仲間やMFの万華鏡を楽しく鑑賞する事もできた。

(写真3) 自分だけの万華鏡作り



④「保護者懇話会」

今回1家庭の参加ということで、人数を絞り保護者・施設職員・アドバイザーの3名での実施となった。(初参加保護者)現在の子どもの様子や悩みが語られ、思いを共有する場となった。

⑤「メンタルフレンド会議」

1日の参加者の様子や、MFの振り返りの場として設定している。MFと参加者との接し方やその対応についてみんなで考える場ともなっている。

⑤活動2「海で遊ぼう」

参加者の活動の意欲、コミュニケーションの向上を考え楽しめる内容として新しいプログラム「バナナボート」を計画した。バナナボートは一度に多く乗ることができないので、乗るメンバーや順番を決めて行った。バナナボートの上で家族、兄弟、MFとコミュニケーションを取ることができた。また、ボートの上で立ち上がりいろいろなポーズを見せ、できる喜びも感じることができた。

(写真4) 海で遊ぼう



⑥別れのつどい(まとめ・振り返り)

別れの集いの前に参加者は、MFと一緒に振り返りを行った。

メンタルフレンドの感想発表では、ふれあいキャンプの思い出や、エピソードが語られた。参加者が、香々地を去るときに車の中で、見えなくなるまで手を振る姿が印象的でした。

(写真5) MFと一緒に振り返り



(9) 事業評価

第2回ふれあいキャンプへのアンケート結果(データ対象7名)

○参加者

プログラムについて

	内容	楽しかった	少し楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
①	自分だけの万華鏡をつくろう	2	1	0	0
②	わくわくタイム	3	0	0	0
③	海で遊ぼう	2	1	0	0

自分の事について

	内容	できた	少しできた	あまりできなかった	できなかった
①	積極的に取り組む事ができた。	2	1	0	0
②	MFと話ができましたか	3	0	0	0
③	キャンプを楽しむことができましたか。	3	0	0	0
④	まわりの力をかりずに活動できましたか。	2	1	0	0

○MF

参加前と後での変化について

	内容	4 (大)	3	2	1 (小)
意欲	活動に最後まで意欲的に取り組んでいた。	1	4	1	0
コミュニケーション	MF や仲間に積極的に取り組んでいた。	5	1	0	0
自己肯定感	活動に主体的に取り組んでいた。	5	1	0	0
自立	MF や大人の力を借りずに活動できた。	3	2	1	0

2 成果と課題

(1) 成果

◎ プログラムについて

- すべての活動に参加者全員が楽しかったと答えている。
- MF の事前学習の時間を確保できた。
(過去のふれあいキャンプ資料、過去の参加者資料、香々地青少年の家の利用手引き)
- メンタルフレンドは、子どもたちに積極的に話しかけ個別に向きあい、各活動においても意欲的に支援していたため、一人ひとりに細かな対応ができ、最後まで全員がキャンプに取り組むことができた。
- 保護者懇話会は、子どもたちの現在の家庭・学校での様子や保護者の思いを共有し、共に考える有意義な場となっている。
- 保護者会で、学校へ行く行かないよりも、「登校で自信をなくしたりしないか」、「どうしたら意欲を持てるか」などの相談がだされた。
- 「わくわくタイム」は自分の好きな内容で MF と交流できるため、参加者全員が楽しく実施できている。家にこもりがちな不登校の子どもの自己決定の場としてこれからも実施していきたい。
- 「自分だけの万華鏡をつくろう」では、一人ひとりが自分の力で万華鏡を作成するように MF も自分の万華鏡をつくり、一緒に対話しながらの作成を試みた。自分の作品を発表する姿や、MF と見比べる様子が見られコミュニケーションや自己肯定感につながる取組になったと思う。
- 夕食・朝食・昼食と 3 回の食事を行った。自分の食事だけでなく、ごはんや汁物の準備など協力して行うことができた。
- MF のきめ細かい対応と無理のないプログラムによって違和感なく実施できた。
- MF のアンケートでは、参加前後の子どもたちの変化について回答してもらった
- MF のアンケートには、子どもが活動の中で変わった様子や場面が記述されている。参加者のそばで気持ちに寄り添いながら活動を共にする MF の存在が参加者の気持ちの変化を促している。

(2) 課題

- 今回 1 家庭 (子ども 3 大人 2) の参加があった。事前の連絡で、コロナ禍の心配や、土日の行事の重なりから参加者が少なくなった。
- 大学生 (MF) の参加が、直前までわからない状態であった。